

甲斐と萬葉集 (二)

— 廣瀨本萬葉集の書写者 —

Kai and Man'yōshū (2) : On the Scribes of the Man'yōshū, the Hirose Manuscript

鈴木 武 晴

SUZUKI Takeharu

一 序

前稿「甲斐と萬葉集 (一) — 春日昌預と萬葉集^[1]」(都留文科大
学研究紀要第五十七集、二〇〇二年八月平成十四V十月十九日発行)
では、廣瀨本萬葉集の書写責任者と覚しき春日昌預^{かすがまさやす}の、萬葉仮名を
用いた歌九十首を収録する「家集」(天明五年—寛政六年)の歌々
を、萬葉集歌との関連に留意しつつ検討した。その結果、昌預が萬
葉集歌を深く読み込んでおり、萬葉集歌に学んで自己の歌の世界を
構築していることが明らかになった。この「家集」の作歌の中には、
廣瀨本萬葉集に賀茂真淵『萬葉考』の訓説の書き入れが見られるこ

と響き合うように、『萬葉考』の訓説に拠る萬葉集歌を踏まえた
例があることを突きとめた。また、廣瀨本萬葉集には卷三の「挽歌」
部の三六二、四四九、四七二、四七七の歌句に対しての昌預の手に
なる書き入れが存し、昌預が卷三「挽歌」部の歌々を入念に読み込
んでいたことを物語っているが、その四四九歌や四五〇歌の表現を
踏まえて、昌預は亡父哀悼追慕詠八六三を詠み成していることも明
らかにした。以上の考察に基づいて、「天明元年十二月」の奥書を
有する廣瀨本萬葉集の書写及び書き入れの経験が、上記家集に萬葉
集との有機的関連をもつ歌々の結実をもたらしたと論じた。

さらに、『校本萬葉集十八 新增補 追補』(一九九四年十二月二
十二日発行、岩波書店)の「廣瀨本萬葉集解説」に翻刻所引の「権

「宮奉納歌之序」及び「駿河国廬原郡蒲原郷稚宮大明神奉納歌十二首」の春日昌預の歌が、萬葉集との関連の深い上記「家集」（天明五年—寛政六年）にも見られることから、この資料を検討し、春日昌預の廣瀬本萬葉集の底本の入手経路と廣瀬本萬葉集の書写に携わった人々を語り告げる重要資料と推断した。前掲拙稿では、結論部分に言及するにとどめたので、本稿において具体的に論述する次第。

二 稚宮奉納歌の序と歌十二首

稚宮奉納歌の序と歌十二首の資料（序は宣命書、歌は萬葉仮名表記）の翻刻の全体をわかりやすく読み下したものは、前稿に掲げたので、それを部分に区切って検討してゆきたい。

まず、「稚宮奉納歌之序」の部分。

稚宮奉納歌之序

往昔、緑青吉寧樂の朝廷の御代、山部宿祢赤人、鶏が鳴く吾妻に下向し賜へる時、不盡山を見放けて哥作り賜ひし。打ち縁する珠流河の国田兒の浦の辺の蒲原郷なる倭歌宮の神社は、山部宿祢赤人の霊を祭祀となむ。此の神社に仕へ奉る某主の乞ふ志のまにまに萬葉集の中より掻く数四十余の歌をしも書き聚め一卷となも成せり。夫次に朋友等と十二首の歌を作りて共に大御神の廣前に捧ぬ。実に言葉の道に遊ばむ輩は挂巻も恐き此の瑞籬の神徳を仰ぎ奉らざらめや。時は天明六年秋八月望の日、なまよみの甲斐の国山梨懸萩原元克云ふ。

この序には、①奈良朝に山部赤人が東に下った時、不盡山を見放けて歌を作ったこと、②駿河の国の田子の浦のほとりの蒲原郷にあ

る倭歌宮神社は山部赤人の霊を祭祀していること、③この神社に仕え奉る某主の乞う志のままに、萬葉集の中より四十首余りの歌を書き聚めて一卷と成したこと、④朋友等と十二首の歌を作り、萬葉集の一卷とともに大御神の広前に捧げたこと、⑤時は天明六年秋八月の望の日（陰曆の十五日）であること、⑥この序と歌が甲斐の国の山梨縣の萩原元克の手によって記されたものであること等が記されている。

神の広前に捧げられた萬葉集一卷がどのようなものであったかについては、「奉納歌十二首」の読解を通して次第に明らかになってくるであろう。

「駿河国廬原郡蒲原郷稚宮大明神奉納歌十二首」の最初に立つのが、春日昌預の父春日翼の次のような歌である。

霞

春日翼

白雲もい去きはばかる不盡の嶺のみ雪も春の霞たなびく

先掲の「序」にいう山部赤人の「不盡の山を望る歌」（萬葉集卷三・三一七―八）を踏まえた歌である（前掲拙稿）。特に意識したと思われる箇所を傍線によって示せば、次のようになる。

山部宿祢赤人、不盡の山を望る歌一首并せて短歌

天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 不盡の高嶺を 天の原 振り放け見れば 渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も 行きはばかり 時じくぞ 雪は降りける 語り告げ 言ひ継ぎ行かむ 富士の高嶺は（二二七）

反歌

田兒の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ不盡の高嶺に雪は降り

ける (三二八)

原文表記も双方とも「白雲母伊去波伐加利」(赤人三二七)と「白雲母伊去波伐加流」(翼歌)、「不盡能高嶺尔雪波零家留」(赤人三二八)と「不盡能嶺乃美雪」(翼歌)とあり、共通している。このことから翼が萬葉集をこよなく愛し、上掲の赤人の「不盡の山を望る歌」を表記とともに記憶し愛唱していたことがうかがえる。翼歌結句の「霞霏霏」は、そのことを裏付ける。とともに、さらに新しい事柄を語り告げる。この結句の表現と表記を合わせ持つ事例は萬葉集中に五例。それは、萬葉集の巻十「春雑歌」部の冒頭部に古歌として立つ柿本朝臣人麻呂歌集所出歌一八二一―一八二八の七首中の次の五首である。

- ・ ひさかたの天の香具山この夕霞霏霏春立ちらしも (一八二二)
- ・ いにしへの人の植えけむ杉が枝に霞霏霏春は来ぬらし (一八二四)
- ・ 子らが手を巻向山に春されば木の葉しのぎて霞霏霏 (一八二五)
- ・ 玉かぎる夕さり来ればさつ人の弓月が岳に霞霏霏 (一八二六)
- ・ 今朝行きて明日には来ねと言ひし子か朝妻山に霞霏霏 (一八二七)

右掲歌と翼歌との共通現象は偶然に生じたのではあるまい。翼がこれらの人麻呂歌集歌の表現を表記とともに記憶しており、それを自作に襲用したためと考えられる。翼は、赤人の「不盡の山を望る歌」(三二二―三七八)を踏まえるとともに、人麻呂歌集歌の表現を表記とともに襲用して一首を成したのである。ただし、右の人麻呂歌集歌の中では、特に第一首一八一―二を意識したであろうと思う。この一八一―二歌には「霞霏霏春立下」とある。天の香具山にたなび

く霞が春の到来を告げるのである。翼はそのことを強く意識して「不盡能嶺乃美雪毛春乃霞霏霏」と不盡の嶺の美雪に霞がたなびく春の景を詠むことによつて、駿河国の春の到来を寿いだのだと思われる。その際に、一八一―二歌と同様、山にたなびく霞に春到来を感じる歌で雪の降り積もる山に霞がたなびいていることを詠んだ次掲歌一四三九をも想起したに相違ない(一四三九歌の「遠山」は、直前歌一四三八に「春日の里」、直後の一四四〇歌に「高円山」が詠まれていることを考慮すると、「春日山」と覚しい)。

中臣朝臣武良自が歌一首

時は今は春になりぬとみ雪降る遠山の辺に霞たなびく (八二四三九)

こうして、春日昌預の父翼は萬葉集に精通していたと言えよう。「奉納歌十二首」のうち、「稚宮奉納哥之序」の赤人関係記述と直接響き合うのは、この春日翼の歌のみである。叙上の翼歌と萬葉集歌との有機的関連と、「序」の赤人関係記述と翼歌との響き合いとを考慮すると、「序」にいう四十余首の萬葉集歌一卷を成す際に選歌のもとになった「萬葉集」は、廣瀬本萬葉集の底本であったと思われる。前稿では廣瀬本萬葉集の参照の可能性があることについても言及したが、その可能性はきわめて少ないであろう。なぜなら、先述の赤人歌三二七の「白雲母伊去波伐加利」の箇所「伐」の字を廣瀬本には「代」に作り、「伊去波伐加利」(「去」の訓は、「サリ」を消して「ユキ」と記している)とあるからである。元になつた本が、廣瀬本萬葉集の底本であったとすると、それは、春日翼が所蔵していたものと推定される。翼は、国学を修め、持明院流書道の奥儀を極めた人であり、富裕なその家には和漢の古書を収蔵した

という（『山梨百科事典』『加藤竹亭』へ佐藤八郎氏担当執筆）、一九七二年六月、山梨日日新聞社）。その中に、廣瀬本萬葉集の底本となった、定家本萬葉集を祖とする写本が存したのではないかと推察されるのである。そして、翼が、その写本の書写を子の昌預らに命じたものと思われる（第三節に詳述）。

その春日昌預の歌が第二首として立つ。

桜

かぎろひの暮の月は照らせれど桜の陰の起たまく惜しも

初句「かぎろひの」は、原文「玉蜻能」。その「玉蜻」は萬葉集では「たまかぎる」と訓むべき字である（2107、101816、102311、112700、123085）。けれども、ここは「玉蜻」の下に助詞「の」を表わす「能」の字がある。よって、「玉かぎる」ではなく、「かぎろひの」と訓むべきであろう。「玉蜻」は旧訓「かぎろひの」。昌預は旧訓によって「玉蜻能」と表現したのであろう。旧訓、特に賀茂真淵の『萬葉考』の訓説（たとえば101816の「玉蜻」を「カギロヒノ」と訓んでいる）に拠ったのであろう。前稿に指摘したように、昌預は『萬葉考』の訓解説によって「家集」（天明五年—寛政六年）の次のような歌を詠んでいる。

青旗の小旗の色も山際に夕べの雲と棚引けるかも（八二四）

名細しき月の光は照らせれど心さぶしも無き人思へば（八六九）

前者八二四歌の「小旗」は、踏まえた萬葉集2一四八の『萬葉考』の説に拠り、後者八六九歌は、踏まえた萬葉集柿本人麻呂歌2二二一の第三句についての『萬葉考』の訓説に基づいている。これと同様のことが「玉蜻能」についても言えよう。また、当昌預歌第三句「照らせれど」（原文「雖照」。「家集」に収録の同一歌には「雖照有」

とあることからこのように訓む）も、『萬葉考』の訓説による萬葉集人麻呂歌2二二一第三句の襲用と思われる。

先述のように、第一首の春日翼の歌の「霞霏霽」は、萬葉集卷十「春雑歌」部の冒頭に群として立つ人麻呂歌集歌を踏まえての表現であった。その中に、「此夕」を詠みこむ一八一二歌が存し、第二句までを『萬葉考』に「玉蜻夕去来者」と訓む先掲一八一六歌が存する。昌預はそのことを知っていたであろう。そして、「玉蜻能暮乃」と詠んだものと察せられる。また、霞と夕月とが密接にかかわることは、萬葉集卷十「春雑歌」部の「月を詠む」歌群（二八七四—六）の、

春霞たなびく今日の夕月夜清く照るらむ高松の野に（一八七四）

の歌が裏づける。このように昌預歌は父翼の歌に密着する。

昌預歌の上三句は、叙上のように『萬葉考』を通しての人麻呂歌集歌と人麻呂作歌の表現の影響をうけて、月の照ることを詠む。そして逆接の「ども」を介して、下二句の心情を表出している。その下二句「桜の陰の起たまく惜しも」は、月の光によって桜の陰が地に起つことを惜しむことをいう。すなわち、当歌は、昼の光の中で見る桜の美しさを讃える心をもって詠まれた歌と考えられる。この歌は、先にも触れたように昌預の「家集」（天明五年—寛政六年）にも見られ、そちらは五首一群の第一首で、五首は奉納される前の昌預の歌稿の状況を伝える貴重な資料と判断される。それを掲げれば、次のとおり（本文は、吉田英也編『春日昌預全家集』を参照し、原本を確認して記したものの、『全家集』の訓を四箇所下記のように改めた。七六六歌の原文「玉蜻之暮」の訓「玉かぎるしぐれ」↓「かぎろひの暮」、原文「雖照有」の訓「照らせども」↓「照らせれ

ど」。七六七歌の原文「分行如」の訓「分け行くがごと」↓「分け行くごとし」。七七〇歌の「吹きな散らせそ」↓「吹きな散らしそ」。

天明六年午七月

駿河国廬原郡蒲原村 稚宮大明神奉納十二首内

桜

七六六 玉蜻之暮之月者雖照有桜能陰廻起卷惜毛

(かぎろひの暮の月は照らせれど桜の陰の起たまく惜しも)

七六七 足日本之山乃桜廻真坂庭八重立雲平分行如

(足引の山の桜の目前には八重立つ雲を分け行くごとし)

七六八 行暮志桜之陰尔宿共不知伝妹之阿乎待良牟加

(行き暮れし桜の陰に宿るとも知らずて妹が吾を待つらむか)

七六九 烏玉之夜目尔母見益終日仁桜乃花能艶不飽者

(ぬばたまの夜目にも見ませ終日に桜の花の艶飽かねば)

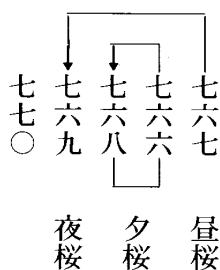
七七〇 動風裳莫吹散桜花吾兄乃君之見尔来及者

(そよ風も吹きな散らしそ桜花吾兄の君が見に来るまでは)

「天明六年午七月」は右五首が製作された年月を示し、実際に奉納されたのは「天明六年秋八月望の日」であることとその歌が七六六歌の一首のみであることが、先掲『校本萬葉集十八 新增補 追補』の「廣瀬本萬葉集解説」所引の「稚宮奉納哥之序」と「奉納歌」によって知られる。

七六六歌は、実際に奉納された歌であるので、五首の最初に押し立てられたものと推定される。けれども、「かぎろひの暮」という時間帯と「桜の陰の起たまく惜しも」の表現を考慮すると、本来は、昼間の七六七歌と「行き暮れし桜の陰に宿る」ことを詠む七六八歌の間に存したものと推定される。とすると、先述のように、七六六歌の「桜の陰の起たまく惜しも」が、昼の光の中で眼前に見る山桜の雄大な美しさを讃える七六七歌の心を受けて表出されたことが鮮明になる。

五首の本来の形は、次のような対応を意図して詠まれた一つの有機的構造体であったと考えられる。



七七〇歌には時間帯を示す言葉はない。思うに、このことは、前歌七六九歌の「終日」をうけて一連の歌を歌い収めたためと見られる。

右のような五首の表現と、五首本来の配列と構造（特に第四首まで）には、萬葉集卷八「春雑歌」部の山部赤人の次のような四首歌の表現と対応構造の投影が濃い。

山部宿禰赤人が歌四首

春の野にすみれ摘みにと来し我ぞ野をなつかしみ一夜寝にける（二四二四）

「あしひきの山桜花日並べてかく咲きたらば甚恋ひめやも（一

四二五)

我が背子せごに見せむと思もひし梅の花うめそれとも見えみえず雪ゆきの降ふれ
ば(一四二六)

明日あすよりは春菜はるな摘とまむと標しめし野のに昨きの日も今日けふも雪ゆきは降ふりつ
つ(一四二七)

昌預はこの四首のうち特に「あしひきの山桜花」を詠む第二首一四二五歌を意識したと考えられる。そして、「あしひきの山桜花日並べてかく咲き」を昌預なりに具体化させて、「足引の山の桜の目前には八重立つ雲を分け行くごとし」(七六七)と詠んだのである。このことから、七六七歌が本来の形の第一首と捉えることが保証されよう。

また、昌預は、赤人歌第一首一四二四の「野をなつかしき一夜寝にける」をうけて、七七八歌に「行き暮れし桜の陰に宿るとも」と詠み、「……知らずて妹が吾を待つらむか」と「妹」を案じて一首を歌い収めている。また、昌預歌七六九の「ぬば玉の夜目にも見ませ」と七七〇歌の「吾兄の君が見に来るまでは」の表現は、赤人歌第三首一四二六の「我が背子に見せむ」を意識しての表現であろう。

昌預歌には、萬葉集の赤人歌四首のみならず、卷十一「春雑歌」部の「花を詠む」歌群の歌の投影も見て取れる。すなわち、昌預の七六六歌下二句の「桜の陰の起たまく惜しも」には卷十の「桜花いまだ見なくに散らまく惜しも」(一八七〇歌下三句)が、また昌預の七六九歌第四、五句の「桜の花の艶飽かねば」には、

見渡せば春日の野辺に霞立ち咲き艶へる桜花かも(一八七二)

の第四、五句が投影していよう。10一八七〇と10一八七二は、昌預歌七六六の上三句の考察の折に浮上した10一八七四のすぐ前に存す

る歌である。

そして、昌預歌には、賀茂真淵の『萬葉考』の訓説による柿本人麻呂歌や人麻呂歌集歌の表現に学んだ跡が見られることも重要である。先述したように、七六六歌の上三句には人麻呂歌集歌10一八一六や人麻呂作歌2二二一の表現が投影している。また、七六七歌の「八重立つ雲を分け行くごとし」は、柿本人麻呂が萬葉集の2一六七に用いた「天雲の八重かき別けて」(一には「天雲の八重雲別けて」といふ)の表現の応用と思われる。また、七七八歌の「知らずて妹が吾を待つらむか」は、次の歌の表現を意識したものと見て狂いはない。

柿本朝臣人麻呂、石見の国に在りて死に臨む時に、自ら傷みて作る歌一首

鴨山の岩根し枕ける我をかも知らにと妹が待ちつつあるらむ

(二二三)

見て来たように、昌預歌七六六、七七〇の五首は、赤人歌と人麻呂歌・人麻呂歌集歌の表現を踏まえており、そのことは第一首の翼の歌の手法と規を一にすると見えよう。そのうち、本来の第一首と推定され、歌としても五首の中では最も秀れていると鑑賞されるのが七六七歌。しかし、昌預はその歌を奉納せずに、本来第二首の位置に立っていたと覚しき七六六歌を奉納したのは、何故かという疑問が生じる。その疑問を解く鍵になるのが、「稚宮奉納哥之序」に記されている「天明六年秋八月望の日」という奉納日である。昌預は、「秋八月望の日」との縁を考慮して、春の月を詠みこむ七六六歌を奉納歌とすることを決定したのであろう。その際に、先述のように、冒頭に立つ父翼の歌と心に最も緊密に連なるということも考

慮したであろう。

昌預歌の次に、第三首として立つのが、次の夏歌。

霍公鳥

藤原元直

我がやどの花橘のかぐはしみ山霍公鳥こゆ鳴き渡る

作者の「藤原元直」は未詳。歌は、萬葉調で、次のような萬葉歌の表現を合成したような歌になっている。

1 我がやどの花橘にほととぎす今こそ鳴かめ友に逢へる時 (8-1)

四八一、原文「我屋前乃花橘」の表記も共通する)

2 …ほととぎす 鳴く五月には 初花を 枝に手折りて 娘子ら

に つとにも遣りみ 白栲の 袖にも扱入れ かぐはしみ 置

きて枯らしみ… (18四一一)

3 ほととぎす 来鳴く五月に 咲きにほふ 花橘の かぐはしき

親の御言… (19四一六九)

4 橘の花散る里に通ひなば山霍公鳥響もさむかも (10一九七八)

5 卵の花の過ぎば惜しみかほととぎす雨間も置かずこゆ鳴き渡る

(8一四九一)

第2、第3例から、当藤原元直歌は五月の歌として詠出されたものと覚しい。それゆえ、次の第四首は「五月雨」の歌。「五月雨」は、右掲の第5例の8一四九一歌のように、「ほととぎす」ともかわる。

五月雨

岩間徳光

一昨日も昨夜もかくのみとの曇り晴間無く降る五月雨の空

作者「岩間徳光」については未詳。この歌は萬葉集の、

・みもろの 神なび山ゆ との曇り 雨は降り来ぬ… (13三二一)

六八)

・この見ゆる雲ほびこりてとの曇り雨も降らぬか心足らひに (18四一二三)

などに学んだ歌と思われる。この歌で重要なことは、一首を「五月雨の空」と体言止めで印象深く歌い収めていることである。この表現手法は藤原定家がしばしば用いた手法であることを指摘したい。その歌集『拾遺愚草』の夏歌には、次のように用いられている(本文は岩波文庫の佐佐木信綱校訂『藤原定家歌集』に拠る)。

・山里の軒端のこず糸雲こえてあまりなとちそさみだれのそら

(閑居百首)

・玉ぼこの道ゆき人のことづてもたえて程ふるさみだれのそら

(奉和無動寺法印早卒露瞻百首)

・峯つゞき雲のたゞちに里とどてとはれむものか五月雨のそら

(内大臣百首)

・いたづらに雲あるやまの松の葉のときぞともなき五月雨の空

(春日同詠百首應 製和歌)

・山のはに月も待ち出でぬ夜を重ねなほ雲のぼるさみだれの空

(仁和寺宮五十首)

岩間徳光はこのような定家歌に学んで歌をうたい収めたものと思われる。

奉納歌第五首から二首、秋の歌。

榛

初鹿建雄

秋の野に紐解く萩はこのころのそほ降る雨に散りか過ぎなむ

作者「初鹿建雄」は未詳。歌は「萩」(原文「芽子」)の歌である

けれども、題詞には原文「榛」とある。これは「榛」をハギと訓み、

「萩」を表わすとする『萬葉考』の見解(たとえば、10一九六五の

「榛」を「ハギ」と訓じ、「榛」は「借字也」と記している)に拠つたためと考えられる。歌詠の上二句は、「萩」を雄鹿の妻と見立ての表現。その見立てが萬葉集歌に次のように存することを作者は知っていたであろう。そして、萬葉集歌の男女の恋歌に頻出する「紐解く」を「萩」に応用したのであろう。

・ 鳴く鹿を詠む歌一首并せて短歌

みもろの 神なび山に たち向かふ 御垣の山に 秋萩の
妻をまかむと 朝月夜 明けまく惜しみ あしひきの 山彦
響め 呼び立て鳴くも (9一七六一)

反歌

明日の宵逢はずあらめやもあしひきの山彦響め呼び立て鳴くも (一七六二)

右の件の歌は、或いは「柿本朝臣人麻呂が作」といふ。

・ 我が岡にさを鹿来鳴く初萩の花妻問ひに来鳴くさを鹿 (8一五四一)

当面歌の上二句の見立ての表現には 作者が自身の「初鹿」という姓とかかわらせたユーモアも看取される。

下三句も、萬葉集歌に拠る表現。

・ 高田の野辺の秋萩このころの曉露に咲きにけむかも (8一六〇)

五、大伴家持

・ 明日香川行き廻る岡の秋萩は今日降る雨に散りか過ぎなむ (8一五五七、丹比真人国人)

第四句の「そほ降る」の表現も、萬葉集に

弥彦おのれ神さび青雲のたなびく日すら小雨そほ降る (16三三八三)

と用いられている。作者は、8一五五七の「今日降る」を「そほ降る」に改変して自己の歌に生かしたのであろう。

奉納歌第六首は次の歌。

月

春日昌齡

ものふの八十伴男も名ぐはし今夜の月は見つつもあらむ

秋の「月」を詠んだ歌である。作者の「春日昌齡」は、春日翼の次男。三男の昌預の兄である。昌齡の歌の位置は、第一首の翼の歌と第二首の昌預歌と離れているけれども、奉納日が「秋八月望の日」(陰暦の十五日)であるので、次男の昌齡が八月の望の「月」の歌をうたう栄誉を担ったものと思われる。そして、「多くの大宮人たちも名高い今宵の月を賞美していることであろう。」の意の歌を堂々と詠じている。萬葉集に十例(三四七八、四五四三、六九二八、六九四八、六一〇四七、一七三九九一、一八四〇九四、一八四〇九八、一九四二五四、一九四二六六)見られる「ものふの八十伴男」の表現による歌い出しは、一首に莊重さを加えている。昌齡は萬葉集の「名ぐはし吉野の山」(一五二二)や「名ぐはし狭岑の島」(二二二〇、人麻呂歌)の用法を熟知していたであろう。また、

もしきの大宮人の罷り出て遊ぶ今夜の月のさやけさ (7一〇七六、「月を詠む」歌群の第八首)

の歌や、

・ 雲だにもしるくし立たば慰めて見つつも居らむ直に逢ふまでに

(11二四五二、人麻呂歌集歌)

・ 雁がねの来鳴かむ日まで見つつあらむこの萩原に雨な降りそね

(卷十「秋雑歌」部二〇九七歌)

の傍線部の用法も心得ていたであろう。

奉納歌第七首、第八首は冬の歌。第七首は次のような「雪」歌。

雪

藤原好謙

月影の照るかと思へば夜のほども庭に降り積む雪にぞありける
作者の「藤原好謙」は未詳。歌詠の冬の「月影」は、奉納歌第二首の場合と同様、秋の「月」の縁で詠み込まれたのであろう。第三句の「夜のほども」（夜の闇が白みはじめる時間をいう）は、萬葉集に三例（475四、475五、815三九）。たとえば、

秋の田の穂田を雁がね暗けくに夜のほどもにも鳴き渡るかも

（815三九）

のように用いられている。萬葉集には、「はだら」（ほども）が雪のまだらに降り積もる状況を表わす次のような歌もある。

夜を寒み朝戸を開き出で見れば庭もはだらにみ雪降りたり

には「庭もほどもに雪を降りたる」といふ（1023一八）

作者はこの歌も心得ていたであろう。

続いて奉納歌第八首。

水鳥

小野蒿道

夜くたちて氷やすらしこもりぬ隠沼にすだく鴨群の数鳴きとよむ

作者「小野蒿道」は未詳。当歌の初句と、結句の「数鳴き」は、

萬葉集の山部赤人の

ぬばたまの夜の更けゆけば久木生ふる清き川原に千鳥数鳴く

（692五）

と、それを踏まえての次のような家持歌の表現の襲用と見られる。

夜くたちて鳴く川千鳥うべしこそ昔の人も偲ひきにけれ（19四

一四七）

結句「数鳴きとよむ」は、「数鳴き」と「鳴き響む」（814七四、

814九四、194一四九。特に上記第三例）を合成した表現。

第三句の「隠沼」は、萬葉集にたとえば、「埴安の池の堤の隠り沼」（220一、人麻呂作）、「あぢの棲む須沙の入江の隠り沼」（1435四七）などの例があり、第四句の「すだく」についても、「葦鴨のすだく池水」（1128三三）、「野も多に鳥すだけり」（17四〇一一）などの例がある。第四句の「鴨群」は原文「鴨目」。この「目」は、

小筑波の茂き木の間よ立つ鳥の目ゆか汝を見むさ寝ざらなくに

（1433九六）

の上三句の序の下句へのかかわり方についての『萬葉考』の、「立鳥の群とつぎけたり」（鳥の「群」の約言「群」の縁による）という説に拠ったもので、「群」の意を表わしていると考えられる。当歌にも『萬葉考』の見解が投影していると言えよう。

奉納歌第九首へ目を移そう。

相聞

源 土麿

小山田の稲の穂向きの諸向きに吾は寄りなむ君がまにまに

作者の「源土麿」は未詳。歌は相聞歌で、一読、萬葉集の次の歌を意訳した歌であることに気づく。

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、穂積皇子を思ひて作らす

歌一首

秋の田の穂向きの寄れる片寄りに君に寄りな言痛くありと

も（221四）

土麿が右の二一四歌の表現に対応させて用いた表現も、萬葉集歌に拠っていると見られる。まず、「秋の田の」に対する「小山田の」は、次のような歌に詠まれている。

・言出しは誰か言にあるか小山田の苗代水の中よどにして（4七
七六）

・魂合へば相寝るものを小山田の鹿猪田守のごと母し守らすも
（12三〇〇〇）

・小山田の池の堤にさす柳成りも成らずも汝と二人はも（14三
四九二）

第三句「諸向き」も萬葉集中に一例だけが存する。

武蔵野の草葉もろ向きかまかくも君がまにまに我は寄りにしを
（14三三七七）

この歌は、「武蔵野の草葉がいっせいに靡くように、ああもこうもどんな状況にもあなたの思いのままに私は従ってきたのに……。」の意で、男を責める女の歌である。この歌には、当面歌と同じ「君がまにまに」の表現があり、「我は寄り」の表現も存する。作者源土麿は先掲2一四とともに、この14三三七七を強く意識したと察せられる。土麿歌第四句の「吾は寄りなむ」は、萬葉集卷十六の「竹取の翁の歌」（16三七九一〜三）に和した娘子らの歌九首（16三七九四〜三八〇二）の第二首三七九五に、
恥を忍び恥を黙して事もなく物言はぬ前に我は寄りなむ
と見える。第三首三七九六から第七首三八〇〇までの歌の結句は一様に「我も寄りなむ」となっている。作者はこのような歌の表現も熟知していたであろう。

奉納歌第十首を掲げよう。

別

五味益雄

今日別る明日香の河の河水の行き廻りつつ逢はむ日もがも
作者の「五味益雄」は、寛保三年（一七四三）、甲斐国藤田村

（現若草町）に生まれた。逝去は文化十四年（一八一七）。通称は宗蔵、俳号は可都里。後の化政期（文化・文政一八〇四〜一八三〇）、甲州俳壇の第一人者となる人物である（先掲『山梨百科事典』）。藤田村（現若草町）には、昌預の父翼の師である五味釜川（享保三年△一七一八▽—宝暦四△一七五四▽）が住んでいた。釜川の通称は貞蔵（『山梨百科事典』）。それは五味益雄（可都里）の通称「宗蔵」と似る。案ずるに五味益雄は五味釜川とかかわる人物であろう。

その歌は、第五首の作者初鹿建雄が踏まえた先掲8一五五七の「明日香川行き廻る岡の」を意識しての作と覚しい。

奉納歌第十一首は次のとおり。

驛旅

藤原庸昌

五百重山越えてし来れば故郷の妹や恋ふらむ馬つまづくも

作者「藤原庸昌」は未詳。この歌は、萬葉集の笠金村の、

塩津山打ち越え行けば我が乗れる馬ぞつまづく家恋ふらしも
（3二八五）

を踏まえた作と覚しい。そして、「塩津山」という具体名を、萬葉集の「四年壬申に、藤原宇合卿、西海道に節度使に遣はさゆる時に、高橋連虫麻呂が作る歌」（6九七一〜二）の「白雲の龍田の山の露霜に色づく時にうち越えて旅行く君は五百重山行きさくみ……」（九七二）の「五百重山」（幾重にも重なる山々の意）に改変したものと思われる。

奉納歌十二首の最後に立つのが次の歌。

祝

榛原元克

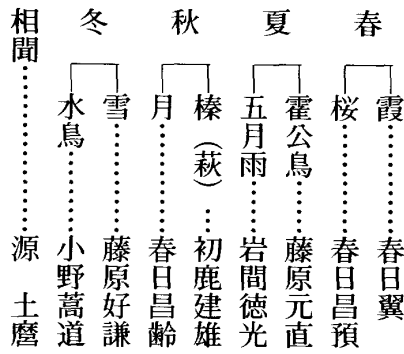
萬代も国安かれと霊ちはふ神の御室に幣奉る
作者名の「榛」は先述のように「はぎ」とよんで「萩」を表わす

借字とする『萬葉考』の見解に拠つての表記。作者「榛(萩)原元克」は寛延二年(一七四九)十一月五日生まれ。天明三年(一七八三)九月に『甲斐名勝志』五巻を刊行。天明七年(一七八七)に本居宣長に入門し、甲斐の国に宣長の国学を導入した人物として知られる(以上、先掲『山梨百科事典』)。また廣瀬本萬葉集の書写と書入れに携わつた人物の一人である。奉納歌を奉つた十二人の中で、春日翼、春日昌預、春日昌齡とともに重要人物であつたことは、その奉納歌が掉尾を飾ることとその歌の内容からうかがわれる。

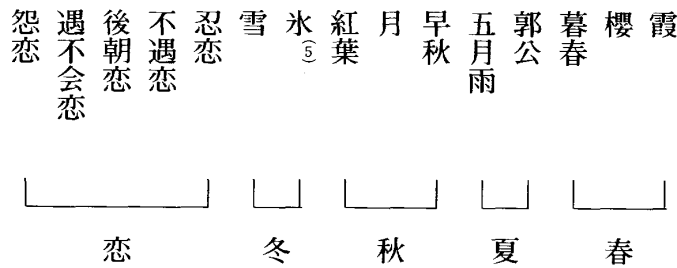
歌は、祝社の歌で、「靈ぢはふ神」は、萬葉集の

靈ぢはふ神も我をば打棄てこそしゑや命の惜しけくもなし(11 二六六一)

の傍線部の襲用であろう。また「幣奉る」も、萬葉集に類同する表現がたとえば「国々の社の神に幣奉り」(20四三九一)、「住吉の我が統め神に幣奉り 祈り申して…」(20四四〇八)と見られる。以上、「奉納歌十二首」を具体的に検討してきた。それに基づけば、この十二首は、次のような構成と考えられる。

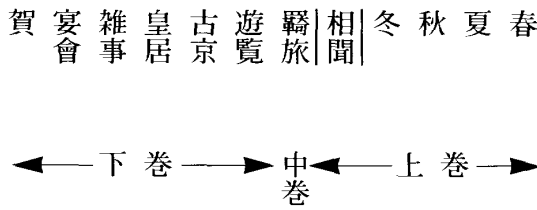


別……………五味益雄
驕旅……………藤原庸昌
祝……………榛(萩)原元克
第八首までは四季の春夏秋冬の順に歌が並び、全体として整然とした構成が浮き彫りになる。では、何故このような構成であるのか。参考にしたものがあつたのではないかと思われる。
類似の構成は、管見に入る限りでは、藤原定家の『拾遺愚草』に見られる。たとえば、「関白左大臣家百首貞永元年四月」には次のような構成になつてゐる(その他に「初学百首」「秋日侍 太上皇仙洞同詠百首應製和歌」など参照)。



旅
山家
眺望
述懐
祝

「奉納歌十二首」の構成は、定家の『拾遺愚草』の「百首」詠の構成に基本的に拠ったものと思われる。ただし、「奉納歌」の方には「相聞」とあり、「驕旅」とある。このことは、『拾遺愚草』の他にも参考にした本があったことを語り告げていよう。そこで調べてみるに、賀茂真淵『萬葉新採百首解』に、次のように「相聞」「驕旅」となっていることを突きとめた。



「奉納歌」と同様、四季の「春」「夏」「秋」「冬」の次に「相聞」「驕旅」の歌がつづくことから、この『萬葉新採百首解』の構成も

参照した蓋然性が高いと思われる。この見方にとって萩原元克が、『萬葉新採百首解』を書写していることも重要である（書写本は山梨県立図書館蔵）。

三

以上、「稚宮奉納歌之序」と「奉納歌十二首」を考察してきた。その結果、「奉納歌十二首」はすべて萬葉集歌を踏まえて詠まれていることが判明した。そのなかには、賀茂真淵の訓説に拠る萬葉集歌の表現を踏まえた事例も見出された。また、萬葉集歌のみならず、藤原定家の『拾遺愚草』の歌の投影と覚しき事例も見られた。構成も三者と深く関わる。萬葉集歌と藤原定家と賀茂真淵に対する意識は、定家本萬葉集の系譜に立つ廣瀬本萬葉集の形成意識であった。このことから、「奉納歌十二首」の十二名の作者は、廣瀬本萬葉集の書写に携わった人たちと、直接書写に従事しなくても、何らかの形で廣瀬本萬葉集の形成に関わった人たちであろうと察せられる。

「奉納歌十二首」はいわば萬葉集歌を踏まえての新作と捉えられよう。してみると、「稚宮奉納歌之序」に「萬葉集の中より掻く数十余の歌をしも書き聚め一卷となも成せり。」と記された萬葉集一卷は、十二人が新作を成す際に踏まえた萬葉集歌とそれにかかわる萬葉集歌を仰ぐべき古歌として聚めたものかと察せられる。本稿の考察の中で言及した萬葉歌の中には、この四十余首本萬葉集に収録された歌があるであろう。それらの歌は、奉納歌十二首と同様の構成で類聚され並べられてあったのではないかと推察されるのである。

この四十余首本萬葉集を作成するための元になった萬葉集は何か。それは、奉納歌第一首の春日翼の歌の読みから、廣瀬本萬葉集の底本であったと察せられる。とすれば、その所蔵者は春日翼より他に考えられない。そして、翼はその本を書写することを子の昌預らに命じたのではなかったか。そうして昌預等が書写を完成させたのが、廣瀬本萬葉集であったと思われる（監修者が父翼と次兄の昌齡、書写実務の責任者が昌預と萩原元克であったか）。それゆえ、廣瀬本萬葉集には、学の道しるべであった父春日翼への敬意と感謝の念が底流していると思われる（先掲拙稿）。とともに、藤原定家や賀茂真淵に対する尊敬の念がこめられていよう。廣瀬本萬葉集の成立を語り告げる卷二十の奥書の「天明元年十二月」のおよそ一月余前の十月三十一日は賀茂真淵の十三回忌。廣瀬本萬葉集の成立は、それ以後であるけれども、その成立に携わった人々の心には、廣瀬本萬葉集を賀茂真淵の御霊に捧げるといふ思いもあつたであろう。

（二〇〇二年）平成十四年五月十二日稿、十月八日補

注

- (1) この論は、廣瀬本萬葉集の書写に携わった人についての最初の本格的な論と位置づけられよう。
- (2) 上掲『校本萬葉集』の「廣瀬本萬葉集解説」には、この資料について、「昌預の周邊の人々との関係を物語る資料」「この一座十二人の中に春日父子三人の名が見えることは興味深いことで、また、これからも、昌預と萩原元克とがかなり親密な関係にあつたことが確かめられる。」と述べるにとどまる。
- (3) 本稿者が所蔵する『竹亭加藤翼翁自筆法本』は、そのことを

具体的に告げる。

- (4) 「初学百首」は、「春」「夏」「秋」「冬」「戀」「雜」の題の順に並ぶ。うち、「雜」は、八つの小題から成り、その四番目から六番目までの小題は「別」「旅」「祝」。この三つの題は、当面の「奉納歌十二首」の「別」「羈旅」「祝」の連続する三つの題と共通する。

- (5) 「氷」の歌五首の第一首には、水鳥の「にほ」が詠まれている。

- (6) 前掲拙稿「甲斐と萬葉集（一）」において、春日昌預が詩的表現「夢の波」を用いて、

父の実の父と共々立ち出でしこの夜の夢の波よ悲しも

（九三三）

と、亡父春日翼を追慕する情を印象深く詠み成していることを指摘した。その後の調査によつて、この「夢の波」の詩的表現は、『拾遺愚草』「員外雜歌」の「堀河院題百首」の、

あかつきの夢の餘波を眺むればこれもはかなきあさがほの花

という秋歌の「夢の餘波」を踏まえた表現と考えられる。このことは、先述の岩間徳光の歌の「五月雨の空」の表現と歌い収め方が『拾遺愚草』の歌詠に学んだものと考えられることと合わせて、「奉納歌」と『拾遺愚草』との関わりを見る本稿の立場を支持する。

- (7) 書写者と書写・書き入れの具体相との関わりについての考察は、別稿に譲る。